

「世界を変えよう基金」ボランティア活動報告書

筑波大学人間学群教育学類 佐藤真織

途上国ボランティア活動支援

渡航先：カンボジア（シェムリアップ）

仲介者：国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部

滞在先：Chea Smon E-learning Center

CAMBIDIAN YOUTH ACTION(CYA)

渡航期間：2018/8/2-2018/8/13

●渡航の目的

カンボジア村の子どもたちに、英語や各国の文化を共有することで興味や世界の幅を広げてもらえるようにする。カンボジアの村で英語がどのように教えられ、どのように使われているのか、また英語教育は必要とされているのかを調査する。

●現地での活動

<ボランティア活動>

村の所在地	<ul style="list-style-type: none">・シェムリアップの市街地からトゥクトゥクで小一時間進んだ田舎の村（住所なし）・トレサップ湖（水上マーケットのある一大観光地）への道中・活動場所の小学校は滞在先から徒歩 15 程
ボランティアメンバーと子どもたち	<ul style="list-style-type: none">・現地のローカルボランティアが 3 名（活動中通訳の役割）・日本、フランス、イタリアなどからの学生ボランティア・1 クラスは 40 人程度で小学校高学年を担当・学力によって 2 クラスに分けられていた
一日の流れ	<ul style="list-style-type: none">・午前：小学校に赴き、ゴミ拾いやガーデニングを行った・午後：ボランティアメンバーでミーティングした後、2 人 1 組で 50 分の授業を行った
授業の内容	<ul style="list-style-type: none">・英語と動物や形容詞のイラストのかいてあるカードを用いた単語練習・英語の歌を使ったゲーム・ビンゴゲーム等 <p>50 分のうち、半分は黒板を用いた授業形式、残りの半分は英語を用いたゲームなど</p>

<調査活動>

・村の状況

ガスや水道は通っておらず、電気も停電は日常茶飯事であった。多くの村人が稲作と牧畜で生活していた。また、メイン通りにはローカルの人向けのマーケットの他、トレサップ湖へ向かう外国人向けのカフェなどもあり、店員は英語が堪能であった。

この村では実に90%以上の子どもがきちんと学校に通っていた。学校側も午前と午後により二部制にすることで、学校外の時間は校庭を開放したり、家の手伝いをしたりする子どもの姿がよく見られた。

この2点から、この村では英語が話せることで観光客向けのサービス業（お土産、屋台など）の充実につながる。そういった点からも英語教育の需要や、学校に通う事への必要性をよく認識しているように感じた。

・カンボジア外国語教育の実状

Grade5.6	3classes/week(30classes)
Grade7.8.9	5classes/week(33classes)
Grade10.11.12	4classes/week(34classes)

今回滞在した村のように、英語教員の不足などの理由から農村部では政府の定めるカリキュラムに満たしていない学校が数多く存在するとも考えられる。また、都市部の比較的裕福な学生の中には英語のみ私立学校で学んだといったケースも見られた。

●ボランティアの成果と考察

今回滞在した村では非常にボランティアの需要を感じた。現地の教員の多くは英語が話せないためボランティアとのコミュニケーションには常にローカルボランティアの通訳が必要ではあったが、学校全体が英語教育の充実のためにボランティアを積極的に受け入れる姿勢であった。

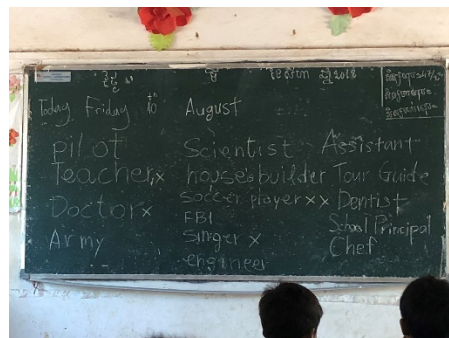
次にキャリア教育の重要性を感じた。小学校の以降の教育からドロップアウトしてしまう子どもの中には家の手伝いの他、勉強の必要性を見いだせずやめていく子も多いらしい。それは、自分の将来について考える間もなく親や親戚の仕事を継いでいくため、学校で学んだことを利用する機会が少ないことに起因する。学校教育の中で進路やキャリア教育を実施していくことで、より意味のある教育が実施できると感じた。

●写真

滞在先の民家



子どもたちの夢



集合写真



授業の様子

